



### 田中派の市場制圧

国内政治の焦点の中心は、結局が迫ったロッキード裁判の中へ、膨張をしいける田中派軍閥と田中元首相をどう考えるかというところである。「現代」三月月号は、田中派を「田中政権獲得株式会社」に見立て、それがどのように市場制圧にのりだしているかを経済学者的な角度から分析している。

(「田中角栄と軍閥 超パワーを暴く」が、そこに見られる綿密な組織と技術は、まさに派閥という領域を越えたこの党内党でもめつた事実で、今までのDIPに驚かされる。

「世評」の連続座談会「戦後保守政治の軌跡」は、三月号を「田中角栄論」にあてているが、その中で後藤基夫は、田中こそ吉田茂以来の保守政治の正統な継承者という説を主張している。つまり、吉田政治の本質は損得で発想する商人的政治であり、田中はそのむき出しのあらわれのこころである。

これを、戦後日本の「保守本流」を貫く哲学として考え直せば、そのままたの政治政治のあり方を説明する基本的な枠組みともなるであろう。しかし、この追論の中で損得勘定という哲学がかくも出てくるに組織化されて出現している背景には、六〇年代の高

度成長と七〇年前後における冷戦の構造変換という時代をぬきにして考えるわけにはゆかない。

### 金脈批判すし通す

立花隆「田中角栄独断インテリ」(金批判)、『文芸春秋』三月月号は、先月号の田原総一郎によるインテリビュの光明な批判として非常な危険な精神的徴候を

### 高島 通敏



<下>

ここで立花が精神的に証拠をあげて田中の主張に反論しているのを引用することはできないので、それは、七年間の問題を追いつけてきた立花ならではの完備な書き込みの批判にあたり記して置きたい。しかも、この中で彼は、田中が首相辞任の理由としているパセドウ氏病は、実は、首相ヨナリスムである。しかし、それも結局は、対米追従という大枠の中でしかない。

高島雄「走り出した軍閥複合体」(「世界」三月号)は、一見削減されたかに見える来年度の防衛費予算も、実質ではアメリカの要求を受け入れて自衛隊の中期業務見直しを繰り返す上げ実施し、次年度以降の防衛費の崩壊的増大へ道を開いたものであることを、詳しく分析している。

## 保守支える損得勘定

◆日本の政治のジレンマ◆  
「抑止力」だけが野党か



立花 隆氏



小林 直樹氏

伴う病気であるという医者の説をも紹介している。かつてアコソとレンシュニクは「現代史を支配する病人たち」という本を書き、マスリッシュは「ニコソンの精神分析」を著したが、政治指導者が欠格とされる病気は、脳いっ血やがんだけではなく、今、今日の専門家たちの見解なのである。日本においても、この問題がもっと追究されることが望ましい。



永井陽之助氏

しかし、問題は、田中個人がどのように批判されようと田中は膨張しつづける日本の政治構造にある。それは、たとえ田中個人が表舞台にもたれなくても、「田中政権獲得株式会社」は繁栄しつづけるであろうことになってあらわれ、これも知れないのである。

サス・ポリテイクスとも表現される日本の保守党の支配様式でも、とも危惧(きん)されるのは、それが一見、どく外圧に抵抗するかのように見えるが、内側の世論の強い支えがなければ、どこまでも歯止めなく崩壊的に変質してゆきかねないといえるのである。

### 保守派からも変化

ソ連の脅威が公然と叫ばれ、軍備強化のための憲法改正の必要が大臣の口から繰り返される現在の状況の中では、平和憲法を軸にしてきた戦後政治のゆるやかなコンセンサスでさえ崩れ去るのではなにかと危惧する人たちが多いためである。

小川直樹「歴史を忘れ、平和主義を逸脱したい人々の暴論」(「朝日ジャーナル」二月二〇日号)は、憲法学者としての常識から、

竹田前統籌議長が発言を批判し、制服組の逸脱を抑えようとして、現在の文民統制のあり方にきびしく警告を発しているが、興味深いのは、六〇年代はじめてから平和論者を批判するリアリスムの政治学者は、六〇年代はじめてから平和論者を説いてきた永井陽之助、中嶋嶺二人が同じように、ソ連の脅威を声高にいう人々を批判し、非軍事経済国家としての日本を「世界のモデル」として押し出すことを主張していることである(対談「いまソ連の侵攻はあるか」(「中央公論」三月号)。



神島 二郎氏

この問いかけに、社会党の石橋政嗣前書記長の論旨(「新しい軍部担当の時代が始まった」(「朝日ジャーナル」二月二〇日号)を対照させてみるに、彼が「彼はインテリビュに答えて、日本がいままでの自衛隊システムで支持してきた六〇年代以降のティフエンス・ミニマム―基盤的防衛力構想が「防衛庁の制服組の相当の部分」によって攻撃的軍備構想へと転換され、対ソ脅威論をテコとして、「憲法第九条、専守防衛、非核三原則、GNP二パーセントの予算上限」という枠組みを崩すための世論誘導がはじまっていると見たからだ」といっている。永井陽之助の論旨は、先月、紹介した内田忠夫の議論ともひびきあう。明らかに、保守派とされてきた人々の中には、現代の日本の状況を、この三〇年間の路線からより軍事的に危険な方向への分岐点としてとらえ、野党批判から政府の牽制(けんせい)へと力点を移しつつある人たちが生まれてきている。そのことの意味は、決して小

「抑止力」だけが野党か、本来、市民運動がはたすべき歯止めの役割に自らを限定するべき、政権が天下党としての自民党に永久に委ねられるのも、また必然というべきであろう。日本の政治の問題は、結局、このジレンマをどう解くかをめぐって争われている。

(立教大学教授・政治学)



研究ノート

わせて行なわれたこの独断インテリビュは、自分の力の源泉は法律に通じていること、また総理辞任の原因は金脈問題ではなく病気のせいだ(田中の言い分を大きくく伝え、雑誌の意図を疑わせたが、今月の立花の批判とあわせ読者の金脈批判の来りすが通れは、いさよひがねだ。

Copyright © 1981 by Asahi Shimbun Co., Ltd. All rights reserved.